慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | F・エヴラル 大規模な《ファルム》について |
|------------------|---|
| Sub Title | |
| Author | 渡辺, 國廣 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1961 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.607(91)- |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19610701-0091 |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0091 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

には不十分であることは云う迄もない。されている。しかし理論的発展はなお統一的な把握を行なわしめると国際収支の問題がより明確にとらえられ、実証化のこころみもな

われる。
し、系統立てることによって、もっとすっきりしたものになると思し、系統立てることによって、もっとすっきりしたものになると思に一層の検討が必要であり、また本書全体に関して、もう少し整理に一層の検討が必要であり、また本書が中心をおくためには、さらしたがって経済成長という点に本書が中心をおくためには、さら

だが、このような問題点があるにしても、経済成長の観点から国

昭和三十六年四月十五日刊・A5・三七六頁・七八〇円) 昭和三十六年四月十五日刊・A5・三七六頁・七八〇円) おっこ ズムの指摘および第三編の国際収支の不均衡の分類、わが国国際収支の動向分析には、新しく示唆される点が多々ある。また国際の強値からの分析が不足しているように思われるが、土屋氏国際収支表のすぐれた分析と第二編における資本蓄積の所得・価格国際収支問題の把握につとめた点では画期的であり、とくに第一編の際収支問題の把握につとめた点では画期的であり、とくに第一編の際収支問題の把握につとめた点では画期的であり、とくに第一編の

新刊紹介

F・エヴラル

ついて』 「大規模な《ファルム》に

十七世紀にはいれば領主はこれまでと違いれる。ではや在地しない。彼は村の生活を捨て、文人ないし武人として宮廷に出仕するようになった。その過程で領主は 土地を買戻し、『ファルム』とした。そしてこの『ファルム』を産とみなし、経営を『ラブルール』に委嘱した。『ラブルール』はそのことにより 『フェルミエ』と呼ばれた。『ファルム』は 十八世にはいってその規模を拡大していった。この論文ではそうした『ファルム』の具体像がの論文ではそうした『ファルム』の具体像がいり周辺について示される。

年には四七五アルパンにまで拡大している。模一六六アルパンであった。しかし一七六九一つの『ファルム』は一七○五年にその規

に帰せらるべきことであった。いた。これはもっぱら当時の農業経営の仕組 だしい場合には三ないし四の教区に分散して まの状態でいることが多かったのである。甚 収めることは困難であった。地片は散在 認められる。しかしこの段階で完全な成功を いたわけではない。統合しようとする努力は を構成する地片がすべて一ヵ所にまとまって 〇ヘクター ム」の平均規模は一八〇へクタールから二五 う。そして十八世紀末にはこれら『ファル た。従って収奪はかなり厳しかったといえよ には二〇七アルパンの規模にまで拡大してい アルパンの規模があった。しかし一七七八年 た他の『ファルム』は一七二七年に一五一 ルに達した。しかし『ファルム』 のま

し牧草は かなり乏しい。」 農学者のそうしたされてい たわけである。「穀物は多い。しかた。体作地を廃止した事実は例外として危険視かに閉込められていた。『フェルミエ』 は契かに閉込められていた。『フェルミエ』 は契かに閉込められていた。農業経営は伝統的な枠のなかに構が作に際し休閑を折込むよう指示されていたのである。一当時バリ周辺では三圓制が支配的である。

La "Les grandes fermes entre Paris et 続いてその経営を追う。 規模な展開を示す。端的にいってパリ周辺で は工業作物の栽培が殷賑を極めた。 く、もはや自明のところであろう。新農法は大 このことが旧い状態を崩壊に導く直接の契機 となったことは、著者の指摘によるまでも れば休作地で甜菜が栽培されている。そして 批判が的中するような農業の状態がほとんど XXXV pp. 210-226. ¥.460. 九世紀まで続いたとみなければならない。 かし多くの曲折を経て一八四〇年以降にな Beauce," Annales de Géographie, Fernand Evrard, 著者は引 ts

--渡辺國廣-

*

×

石沢元晴著

『現代米ソ経済論』

の世界経済の展開の起点となることを明らかルとしての重要な現代史的意義をもち、今後経済競争が戦後における米ソ冷戦のターミナモがら成る。まず第一章において、米ソのこれはまことに便利な書物である。本書は